

[特別展「中国の金銅仏」を終えて]

北魏熙平銘金銅菩薩立像について



東山健吾先生 10月25日

国内の御所蔵家・御所蔵館の御好意によって、名品88件を展示することの出来た特別展「中国の金銅仏」は、11月8日に無事終了しました。

「この美のたより」100号に、中国金銅仏の権威である松原三郎博士が「今日では中国金銅仏に対する関心もかなり深くなり、本館でも中国金銅仏だけの特別展を開くようになったのは極めて感慨深い」とのべていられるように(「中国金銅仏雑感」)、中国金銅仏の、時代を通しての名品のみを集めた展覧会は初めてであったので、個人の方々は勿論、団体のお客様が例年にも増して大勢来館され、研究者の方々からも質・量の両面において好評を得ました。また、10月25日には、成城大学教授東山健吾先生に、「中国初期の仏像彫刻」と題して御講演頂き、中国仏像彫刻全般に渡る大きな視野の中で、人物像が信仰に支えられて初めて仏像へと変わっていく様子を懇切丁寧にご説明下さいました。良い作品を国内に留め置くためには、国の政策が大事なことは言うまでもありませんが、それを支えるのは個人のコレクターや美術館・博物館の力であることを、このような特別企画の展覧会を開催する度に身

に沁みて感じます。

美しく愛らしい金銅仏は文句なしに人々の心を慰め、目を楽ませますが、それら一つ一つの仏像には、中国仏教彫刻史の上で、また、朝鮮やわが国の仏像の源として、重要な要素が極めて多く含まれています。また、より西方の仏像との関連を示す種々のモチーフをも看取できることはまことに興味深いものがあります。それらの諸点については、図録の解説に出来るだけ記しておきましたが、その中の何点かは、事前に拝見する機会が得られず、写真と他の記録された資料を頼りに書かざるを得ませんでした。その為に充分に筆者の所見を伝えることが出来ず、また、頼りにした資料に適切でない箇所があることを、実際に作品を目の前にして知らされたものもあり、愕然としたことでした。そこで、今日はここで、図録の解説の欠を補い、御所蔵家へのお詫びの意味をこめまして、北魏の優れた菩薩像について改めて紹介し、筆者の実作品を見ての見解を述べたいと思います。

図1 金銅菩薩立像 北魏時代



それは写真の図1の金銅菩薩立像です。(図録では作品27です。)本像は先ず鍍金の美しさが目を引きまします。金銅仏の中でも十分な法量を持つ本像の全面を覆う鍍金は、同時代の他の仏像の金色や地肌の質感と同様で何の遜色もない、見事な保存状態です。本像の造形の高度さは更に目を奪うものがあります。五弁の花形を為す冠は力強く斜め上方に花卉を張り、その根元の中央には正面に突き出す五角形の花心状の表現があります。冠の根元より両側に曲線的に強く張り出して、再びまた曲線的に折れる帯の細かい線刻、また、その先端の深く二股に分かれるさま、これらの強調的な造形が像を華麗なものにしています。ここにみられる冠の帯の表現は、古代イランの王が翻しているディアデムと呼ばれる冠の帯と関連していきましょう。顔は特徴的な面長で、広い額を平面的に作り、その面を両脇に直角的に繋げるのも注目されます。険しく釣り上がった眉の下に広い臉がゆるやかに続き、森厳な眼差しを丁寧に表現しています。小鼻を表わし、大きめの口元は微笑して、口角に溝を作り、尖った顎をも写實的に造形します。この頭部の髪表現も際だっており、前髪にボリュームを持たせて前方にふくらませ、髪際(額の髪との境界線)を中央で分かれた曲線としています。

同 部分



まことに細やかな写実性をみせていると言えます。この髪は更に、束に分けて大きく区切り、その中に細線を刻んでいます。肩に円形飾りをつけて、その下に帯を垂下させ、両肩には垂髪先端を二股に表わしています。天衣を肩に大きく掛けて両脇に鋭角的に張り出させ、この天衣は膝前に至って交叉し、両腕の外に魚鱗状に張っています。衣は更に下方にも魚鱗の形に段々をみせて、その一箇所には再び二股に分かれた衣端が見えます。裳裾の裾の厚みのある重なりも立体感を十分に備え、衣端には縁取りを施して、衣文をギリシヤ以来のΩ字状の変形とし、それを二段に繰り返しているのも華やかです。このような衣や天衣の造形は、肩の円形飾りと共にわが国の飛鳥時代の菩薩像に受け継がれているもので重要です。胴で結んだ裾の紐を渦巻状とし、その先を裾近くまで長く下げて房飾りを施しています。また、みぞおちに裾の布の折れをみせる写實的手法。右手に掲げた未開蓮華の立体感に富む瑞々しいふくらみと手の指の繊細さ。左手に下げる珍しい六角形の水瓶の美しさ。その手首の自然的な曲げ具合。腹部を前に突き出す姿勢は、インド以来の三段屈(みぞおちと陰蔵の二箇所において三段に屈する姿勢)を示しており注目されます。

光背の火焰も精緻な彫りであり、中央部を三線で囲んで、頭光などを複雑に表現せずに無地として、像を浮き出させているのも巧みです。まことに洗練された、また、独創的な作風であり、合わせて、四脚座の熙平の年号を持つ銘文も流麗な文字で刻まれています。以上のように本像は丁寧に精緻な造形によっており、北魏菩薩中は勿論、金銅仏全体の中においても、まれにみる作品で重要文化財級のものと言えます。

展覧会を企画する役得は、このような名品に出会えることと言えます。(村田靖子)

季刊 美のたより No.101

平成4年 11月13日

発行 大和文華館